2023 年度秋学期教員アンケートの集計結果

FD・SD 委員会

目次

1. 回答者数と回収率 2
2. 学生アンケートが自身の取り組みの振り返りに役立っているか 3
3. 学生の集中や理解を促す取り組み 5
4. 前回のアンケートで提示した改善策の実施状況 6
5. 今後の改善計画 7
6. 特別な配慮が必要な学生への対応 8

1. 回答者数と回収率

・2023 年度秋学期の教員アンケートの回収率は、28.0%（対象者 336 名のうち 94 名）であった。専任教員のアンケート回収率は、44.4%（対象者 151 名のうち 67 名）であり、春学期の42.2%よりも高かったが、非常勤講師のアンケート回収率は 14.6%（対象者 185 名のうち27 名）であり、春学期の 17.7%よりも低かった（表1）。なお、対象者に占める回答者の割合を計算する際には、サバティカル期間中や留学中の者は除いている。

表1 区分別の回答者数と回収率

区分	回答者	対象者に占める回答者の割合
専任教員	67名	44.4%
非常勤講師	27名	14.6%
全体	94名	28.0%

・本年度秋学期の回答者数は、前年度秋学期の回答者数よりも 6 名増えた。しかし、依然として低い水準にある。回答者が 100 名を超えることを当面の目標としたい（表2）。

表2 年度・学期別の回答者数

	春学期	秋学期
2019 年度	142 名	127 名
2020 年度	149 名	107 名
2021 年度	144 名	115 名
2022 年度	128 名	88 名
2023 年度	98 名	94名

・学部別に専任教員のアンケート回収率を見ると、学部間で大きな差が見られる。社会学部と流通情報学部では回収率が 5 割を超えていたが、経済学部・法学部・スポーツ健康科学部では4割を下回っていた（表3）。また、春学期との比較では、社会学部の回収率は 44.4%から51．9%に、流通情報学部の回収率は 43.5%から56．5%に上昇していたが、経済学部では 43.2%から37．8%に、法学部では 39.3%から37．9%に低下していた。なお、スポーツ健康科学部の専任教員からの回収率は、38.5%で春学期と変わらなかった。

表3 学部別の回答者数・回収率（専任教員）

	専任教員の人数	回答者数	回収率
経済学部	37名	14名	37.8%
社会学部	27名	14名	51.9%
流通情報学部	23名	13名	56.5%
法学部	29名	11名	37.9%
スポーツ健康科学部	39名	15名	38.5%

2．授業アンケート（学生アンケート）が自身の取り組みの振り返りに役立っているか

・「授業アンケートが自身の取り組みの振り返りに役立っているか」という質問に対して、94 名の回答者のうち68 名（72.3%）が、「とても役立っている」または「概ね役立っている」と答えた（表4）。

表 4 振り返りに役立っているか

	回答者数	割合
とても役立っている	14 名	14.9%
概ね役立っている	54名	57.4%
どちらとも言えない	15名	16.0%
あまり役立っていない	9名	9.6%
まったく役立っていない	2名	2.1%

・「とても役立っている」または「概ね役立っている」と答えた者の割合は、前年度同学期と比べて若干減った。また、2020 年度から 2022 年度までの期間と比べると、10 パーセンテージポイントほど低下している。2020 年度から 2022 年度までの期間は、コロナ禍でオンライン授業の科目が多かった（したがって、教員が学生の状況を把握しにくかった）ので、授業アンケートが非常に重要な情報源であった。しかし、本年度は、ほとんどの科目において対面授業が再開され、教員が学生と直接コミュニケーションをとれる機会が増えた。授業アンケートが「とても役立っている」または「概ね役立っている」と答えた者の割合が減ったのは、このような変化を反映しているのかもしれない。実際、記述式回答でそのような意見が見られた。「とても役立っている」と「概ね役立っている」と答えた者の割合は、新型コロナウイルス感染症流行前の 2019 年度の値にかなり近くなってきている（表5）。

表5 振り返りに役立っていると回答した者の割合

	春学期	秋学期
2019 年度	71.8%	70.1%
2020 年度	82.5%	80.4%
2021 年度	78.5%	81.7%
2022 年度	81.3%	73.8%
2023 年度	75.5%	72.3%

（1）教員アンケートに対する肯定的な意見

・匿名で意見を聞けるのは貴重な機会です。自分の講義を客観的に考えるきっかけになる。

・自分が選んだ授業の内容・方法が、学生にとって適当か否かを探る手掛かりになります。

・担当している講義科目がオンデマンドとなっているため、講義期間中は学生の反応が分からない。学生アンケートが振り返りに役立つ。

・全体や科目群の平均値との比較により、自分の授業への相対的な評価がわかる。

・自宅で学生がどれくらい予習・復習に時間をかけているかがわかるので、役立っています。

（2）教員アンケートに対する否定的な意見

・回答率が低いため、問題点が十分に把握できていない可能性がある。学生は履修科目の数だけ回答しないといけないので、大変さは理解できる。

・ほぼ毎回レポート（またはリアクションペーパー）を提出させており、それを使って質問・要望も受け付けているので、授業アンケートの必要性を感じていない。

・学生が、感情のままに、自分勝手にコメントをしているのが散見される。

（3）教員アンケートの改善提案

・本学は、学習に対するモチベーションの低い学生が半数以上だと思います。勉強に意義を見出すことのできない学生の声をきちんと聴くためには、記述式の質問をより多くして、学生の「語り」を分析する必要があると思います。

・回答数が少ない。授業内でマークシートを配布し、学生が回収、各校舎の事務に届ける仕組みにすることを提案したい(手間がかかるため、難しいかもしれないが…)。

3. 学生の集中や理解を促す取り組み

・対話的な講義を行っています。

・聞くだけの時間が長くならないように、グループワーク、また調べる時間を設定するなど工夫した。

・時間を区切って、ひとつの授業に振り返り・時事問題の解説・学生の発表・講義など多様な活動を含め、学生の集中力が途切れないよう努めた。学生の評価はまずまずです。

・適宜、視覚教材を取り入れた。講話一辺倒にならないよう意識し、学生の集中力が持続するように努めた。

・対面授業だったが、Youtube で講義動画も公開した。授業の振り返りができたとの意見があり、学生の理解を深めることができたと考えている。

・予習課題の提出を義務とし、授業では予習の内容を踏まえた集団討議を行った。毎回、討議

の内容を議事メモとして manaba で提出させた。新松戸の少人数の授業では期待した成果に達したが、龍ケ崎の大人数の講義ではグループが多すぎて私のファシリテーションが至らず、期待した水準でグループワークさせることができなかった。

・毎回、授業の要点・感想の提出させたことで、学生の理解度や感想を把握することができた。それをもとに、授業の内容や進度を調整することができた。学生にとっても授業を振り返るよいきっかけになったと思う。

・ゲームのような演習を実施して、学生に興味を持ってもらえるよう工夫した。概ね期待した水準に達していたと思う。

・今年度のゼミでは、ゼミ長に司会をしてもらった。全体の雰囲気はそれほど変わらなかったが、学生がゼミを主体的に運営する意識づけになればよいと思う。

4. 前回のアンケートで提示した改善策の実施状況

・毎回、授業で扱う内容について、意義（何のためにそれを学ぶのか）と到達目標を学生に説明した。

・評価基準を明確にし、補助学習用動画で実技の内容をくり返し見ることができるように工夫しています。

・受講者の多い実技授業において、名前シールを貼るようにしたところ、出席管理の不正行為が激減し、教員、SA、そして学生どうしが名前を覚えるきっかけになった。

・毎回授業終了時に「振り返りアンケート」を実施、次の授業で応えている。履修者の多い講義科目だが、学生の意見・要望をほぼリアルタイムで授業に反映できたので、リタイア者が少なく、成績も上昇した。

・今年度は受講者が少なかったので、教員と学生全員が一緒にディスカッションをして、それを議事録のように manaba のコースコンテンツにまとめていきました。それが授業ノートのようになったことで、欠席者が前回の内容を理解できるようになり、グループワークの遅れや疎外感を抱かない工夫ができたと思います。受講者の人数が増えても、議事録で欠席者をフォローする形は継続できればと思います。

・ディスカッションで、私を通して間接的に他の学生とコミュニケーションをとれたり、他の学生の性格を知れたのがよかったのか、グループワークの際にコミュニケーションや連携がうまくいっていたように思います。

・I've been incorporating cooperative and collaborative classroom activities.

Concurrently, I've been exploring ways to enhance the appeal of my lessons to engage all students and foster an enjoyment of learning English.

・ペアワークに対する肯定的な回答を得ることができたので、継続したいと思う。

・学生が英語をより身近に感じることのできるよう、日常の身近な話題に英語で触れるアクティビティを充実させたいと考えていた。流通経済大学について説明したり、各人の地元のことについて述べたりと、学生自身が関係することについて考え、それを英語で表現する機会を持てた。

5. 今後の改善計画

・専門科目で学生の出身の自治体について発表してもらっているが、学生どうしのコメントがマンネリ化しがちである（「理解が深まった」など一般的な内容ばかりになる）。優れた発表やコメントに対し、何らかのインセンティブ付けをすることを考えている。

・ゼミにおいて学生どうしの交流・相互作用を促すために、ジグソー活動を充実させたい。

・今回は主に 3 回のレポート課題のみにもとづいて成績評価を行った。この方法はレポートが得意な人に有利なので、小テストも導入してほしいという意見があった。検討したい。

・コロナの影響が軽減したので、3・4 年演習における校外演習を活発化させたい。

・教員が自分の伝えたいことを全て授業内で話そうとすると、どうしても時間が足りなくなってしまう。内容を簡素化し、学生の理解度にあったペースで授業ができるよう努めたい。

・授業進度については、毎年かなり悩む。来年度は、中間期授業アンケートで進度の項目だけでも回答してもらえるようにしたい。

・（語学科目における）ChatGPT の利用について考えたい。

・コロナ禍以前と比較すると、全体的に学生の欠席に対するハードルが低くなっているように感じる。ガイダンスや授業内活動を通して、毎回出席することの重要性を訴えたい。

・（教職科目の）模擬授業の際に、前年度受講生を招き、さらに実り多きものにしていきたい。

・今日の日本社会が向かい合っている問題に授業内容を関連付け、学生たちが「これからの日本社会で生きてゆくことは自分自身の問題なのだ」という自覚を促したいと考えています。

・I intend to integrate certain aspects of flipped classroom activities into my teaching approach.

・I would like to increase the academic load for those who are capable, while maintaining a minimum standard so everyone can achieve learning at their own pace and ability.

6. 特別な配慮が必要な学生への対応

(1) 精神的・身体的な障がいをもつ者

・軽度知的障害をもつ学生と、必要な支援があるかについて話した。当該学生だけでなく、すべての学生に対し、課題の再提出期間を設けた。

・担当するゼミに心療内科に通っている学生が 2 名いました。彼らに対しては、出席を強要せずに、休みたいときは休むように伝えました。また、時々電話をして、彼らの話をよく聞き、長所を賞揚するように心掛けました。

・登校できない(電車に乗ることができない)ために授業に出席できない学生がいた。メールでのやりとりはできたので、manaba のコンテンツとしてアップした授業資料を参考に、課題レポートを提出することで対応した。

・手書きで提出物を作成するのが難しい学生がいた。すべての提出物をオンライン入力にすることで対応した。

・特別な配慮が必要な学生に対しては、課題の締め切りを延長した。また、授業を欠席する場合は、代替課題を提示するなどの取り組みをした。代替課題には取り組んでくれたので、ある程度うまく機能していたのではないかと考える。

・ダイバーシティセンターや他の部署、他の教員と情報共有しながら対応しました。それにより学生の参加度合いが改善したと思います。

・ゼミに精神疾患により配慮が必要な学生がいた。遅刻・欠席については大目にみてあまり注意しないようにしたが、大事な場面で遅刻してくることがあり、配慮した上でどのように指導するのがいいか考えさせられた。

・教務課から配慮が必要な学生に関わる情報をいただきましたが、担当科目がオンデマンド授業であるため、学生側からコンタクトがないと対応のしようがありません。当該学生からは一切の連絡がありませんでしたので、特別な対応は何もしませんでした。

・合理的配慮を求める学生が数名いたので、どのような対応が望ましいのか各人から聞き取りを行った。その結果、それらの学生のために個人用の manaba のコースを設置し、そこに各人に合わせた課題を置き、個々に連絡をとりあった。合理的配慮を求めた学生は、課題に取り組み提出もできた。しかし、この方法では業務負担がかなり大きかった。

・担当する科目の受講者に特別な配慮が必要な学生がいなくても、資料や配布物はすべてユニバーサル・デザインとしている。

・届け出はなかったが、おそらく聴力に配慮が必要な再履修の学生が友人と受講していた。慎重に授業を進め、表向きは他の学生と変わりなく接するよう努めた。その結果、当該学生は途中で諦めることなく、無事に単位を取得できた。

・（自閉症や無気力症などの）障害があるはずなのに、学生自身や彼らの親が認識していない者が増えてきているように思う。対応にとても困っている。

・「特別な配慮が必要な学生」として大学から連絡があった者はいなかったが、C-learning を使用した学生の親御さんからの依頼・質問・暴言に苦慮した。その都度、お気持ちに配慮し、真摯な態度で対応するよう心掛けてきたものの、些細な事項(出欠や定期試験の日程の確認等)に関する連絡が学期末まで続いた。C-learning の使い方に関するアナウンスを検討する必要があると思う。

(2) 極端に消極的な学生

・担当するゼミの学生と個人面談を行い、ゼミでの学習と彼らの関心が結びつくことを伝えた。

・ゼミの学生にグループワークができない、人前で話すことができない学生がいた。個別報告は私の前で、私が下を向い状態で報告させ、グループワークとディベートはレポートで代替した。本人は満足していたが、グループワークやディベートで達成したかった目的が代替レポートによって果たせたとはとても思えなかった。

(3) 留学生

・講義科目で今年から実施している振り返りアンケートでは、英語版も準備しました。反転授業に用いる動画でも、一部ですが多言語対応を心がけました。

・日本語能力がかなり低い留学生がいました。私からできるだけ声掛けをして、サポートするようにしました。その結果、授業の出席率も維持されたように思います。

・話すのや聞くのは苦手でも、書くのが得意な留学生もいる。各人の得意な方法で意見を示せるように、レポート、プレゼンテーション、試験、その他の成果物(写真やスライド、動画など)など様々な機会を設けるのがよい。

・日本語能力がとても低い学生の対応に困っている。入試でしっかりと学生の能力を見極めてほしい。

以上